

国内の畜産物の需給動向

牛肉

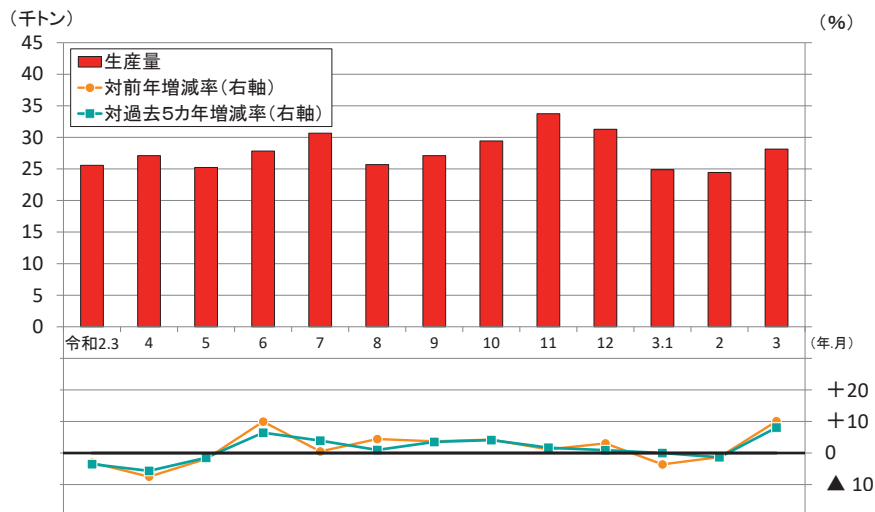
3年3月の牛肉生産量、前年同月比10.1%増

1 令和3年3月の牛肉生産量（部分肉ベース）は、2万8145トン（前年同月比10.1%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図1）。品種別では、和牛は1万3211トン（同18.1%増）と大幅に、交雑種は6826トン（同4.3%増）とやや、乳用種

は7675トン（同3.7%増）とやや、いずれも前年同月を上回った。

なお、過去5カ年の3月の平均生産量との比較では、8.1%増とかなりの程度上回った。

図1 牛肉生産量の推移



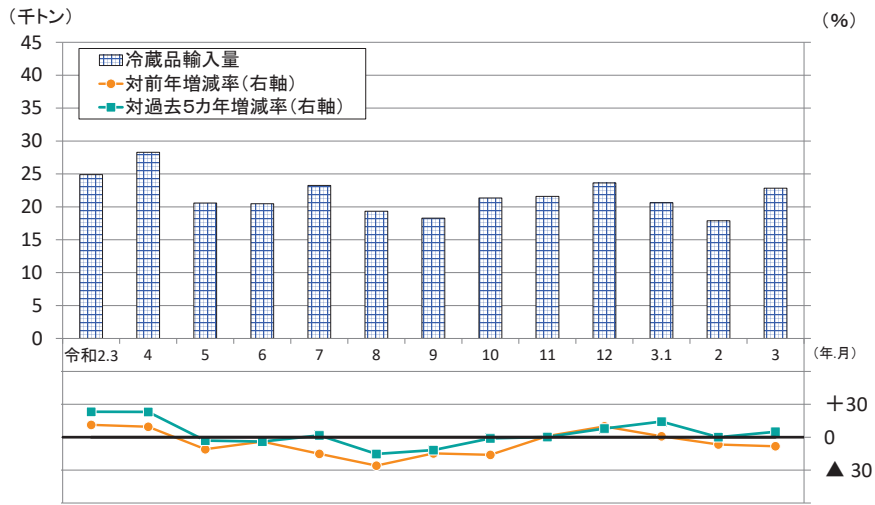
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

2 3月の輸入量は、冷蔵品は、北米からの入船遅れなどから、2万2831トン（同8.3%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図2）。冷凍品は、米国産牛肉の輸入が例年より少なかった昨年の反動などから、2万3350トン（同3.2%増）と前年同月をやや上回った（図3）。この結果、

全体では4万6198トン（同2.9%減）と前年同月をわずかに下回った。

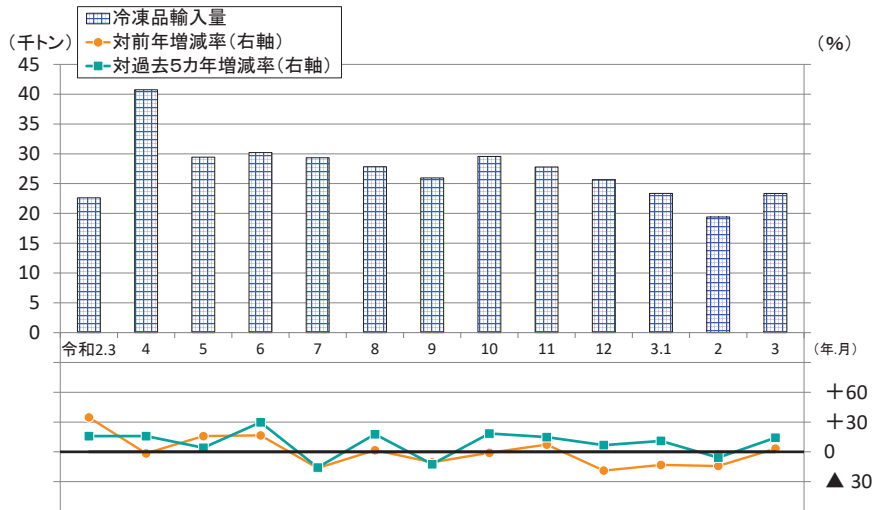
なお、過去5カ年の3月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は4.9%増とやや、冷凍品は14.2%増とかなり大きく、いずれも上回る結果となった。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

3 3月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）は、186グラム（同8.2%減）と前年同月をかなりの程度下回った（総務省「家計調査」）。

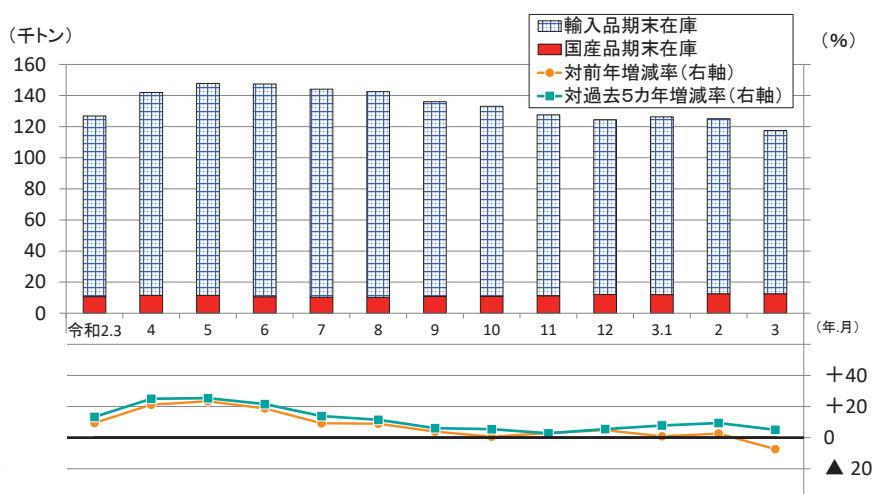
一方、外食産業全体の売上高（同2.9%減）は、緊急事態宣言が解除され人出の回復が見られたものの、営業時間の短縮要請が継続されたことから前年同月をわずかに下回る結果となった（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調

査」）。このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態では、ハンバーガー店を含むファーストフード洋風はテイクアウトなど巣ごもり需要が引き続き堅調となったことから、同9.1%増と前年同月をかなりの程度上回った。一方、牛丼店を含むファーストフード和風はテイクアウトなどが寄与したものの、店内飲食が影響を受けたことから同2.6%減とわずかに、焼き肉も営業時間の短縮が続いたことから同9.7%減とか

なりの程度、いずれも前年同月を下回った。
 4 3月の推定期末在庫は、11万7475トン（同7.4%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図4）。このうち、輸入品は10万4931トン（同9.6%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

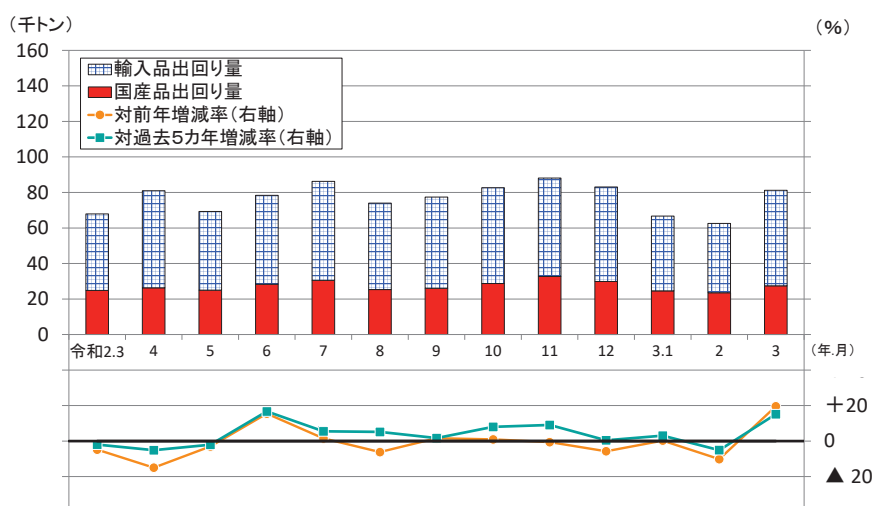
推定出回り量は、8万1223トン（同19.6%増）と前年同月を大幅に上回った（図5）。このうち、国産品は2万7439トン（同10.3%増）とかなりの程度、輸入品は5万3784トン（同24.9%増）と大幅に、いずれも前年同月を上回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 高城 啓)

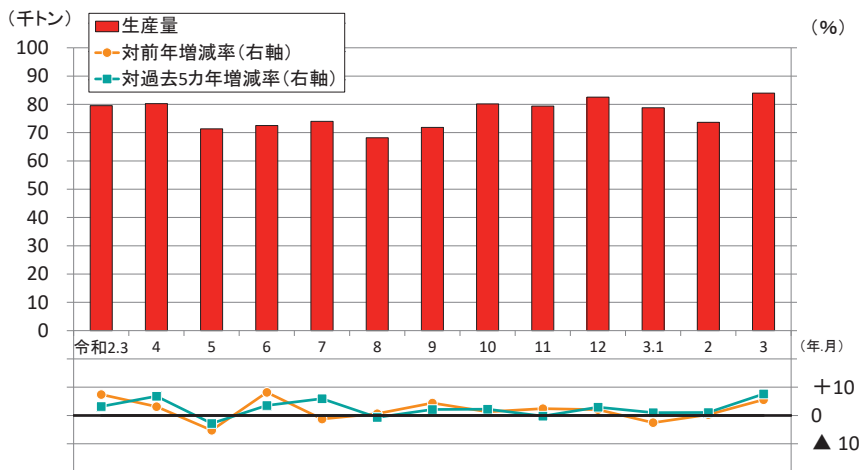
豚 肉

3年3月の豚肉生産量、前年同月比5.6%増

1 令和3年3月の豚肉生産量（部分肉ベース）は、8万3976トン（前年同月比5.6%増）と前年同月をやや上回った（図6）。

なお、過去5カ年の3月の平均生産量との比較では、7.6%増とかなりの程度上回る結果となった。

図6 豚肉生産量の推移



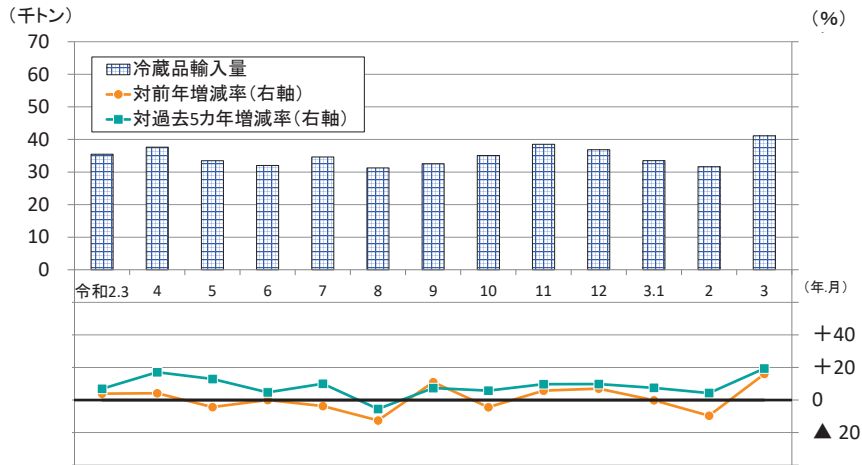
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

2 3月の輸入量は、冷蔵品は、北米からの入船遅れ分が通関されたことから、4万1109トン（同16.0%増）と前年同月を大幅に上回った（図7）。冷凍品は、飼料価格の高騰やアジア諸国を中心とした買い付けによる現地高などから、2万7847トン（同13.5%減）と前年同月をかなり大きく

下回った（図8）。この結果、全体では6万8957トン（同2.0%増）と前年同月をわずかに上回った。

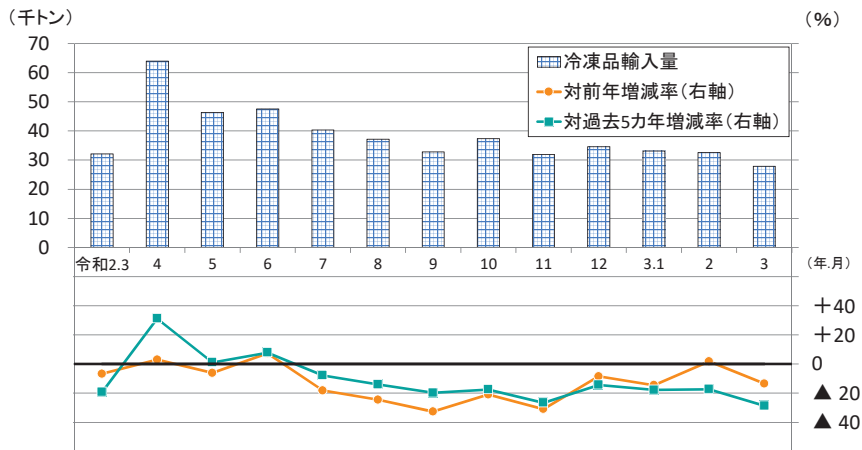
なお、過去5カ年の3月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は19.4%増と大幅に上回る一方、冷凍品は28.6%減と大幅に下回る結果となった。

図7 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図8 冷凍豚肉輸入量の推移



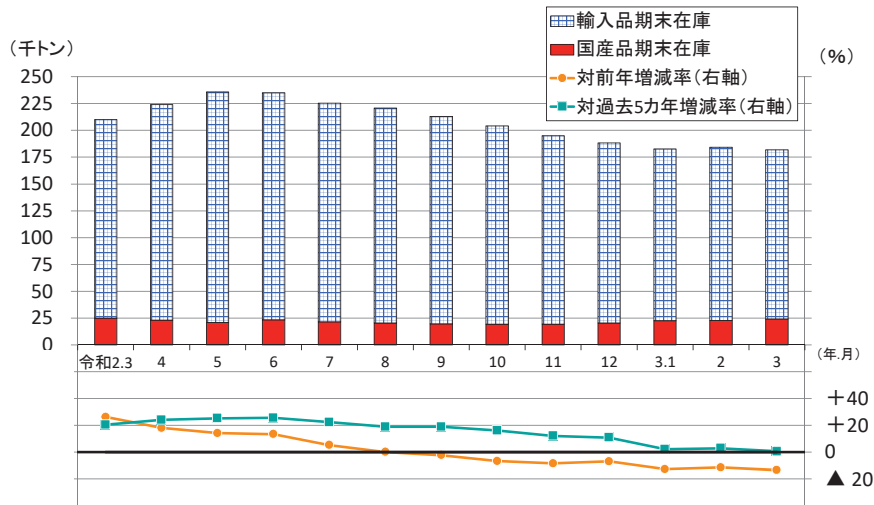
資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

- 3 3月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）は、644グラム（同6.7%減）と前年同月をかなりの程度下回った（総務省「家計調査」）。
- 4 3月の推定期末在庫は、18万1984トン（同13.4%減）と前年同月をかなり大きく下回った。このうち輸入品は、15万7880トン（同14.7%減）と前年同月をか

なり大きく下回った（図9）。

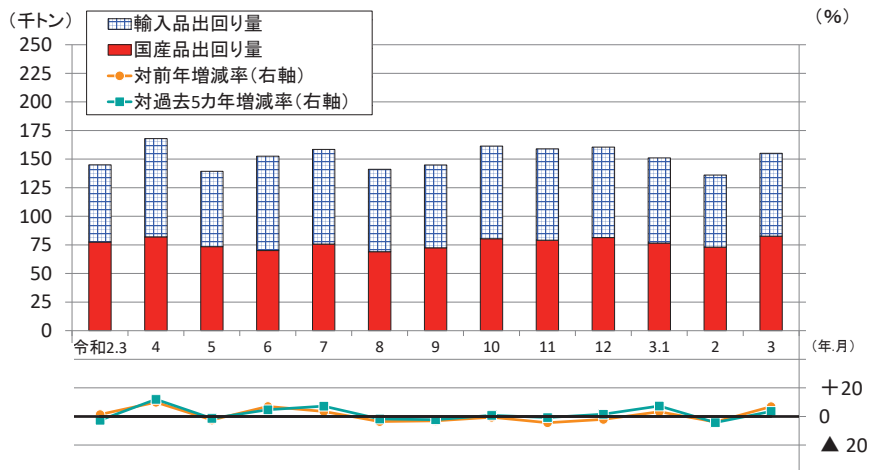
推定出回り量は15万5103トン（同6.9%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図10）。このうち、国産品は8万2627トン（同6.6%増）、輸入品は7万2476トン（同7.2%増）と、ともに前年同月をかなりの程度上回った。

図9 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図10 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 田中 美宇)

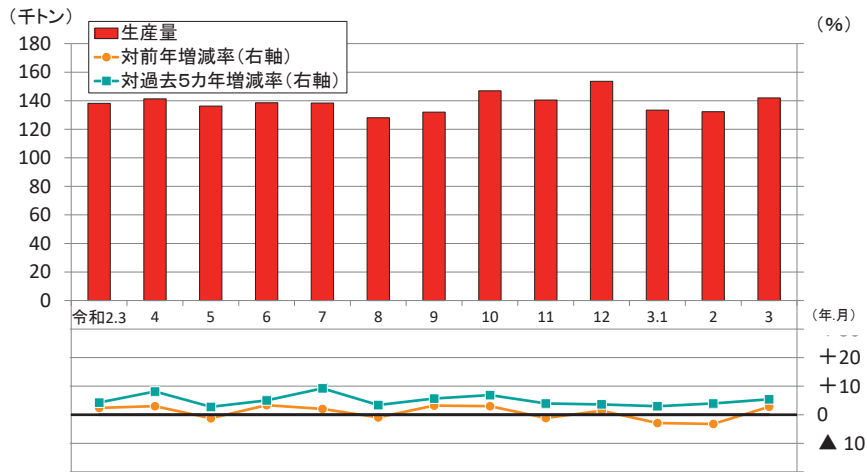
鶏肉

3年3月の鶏肉生産量、前年同月比2.8%増

1 令和3年3月の鶏肉生産量は、好調な需要を背景に、14万1973トン（前年同月比2.8%増）と前年同月をわずかに上回った（図11）。

なお、過去5カ年の3月の平均生産量との比較では、5.4%増とやや上回る結果となった。

図 11 鶏肉生産量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

注1：骨付き肉ベース。

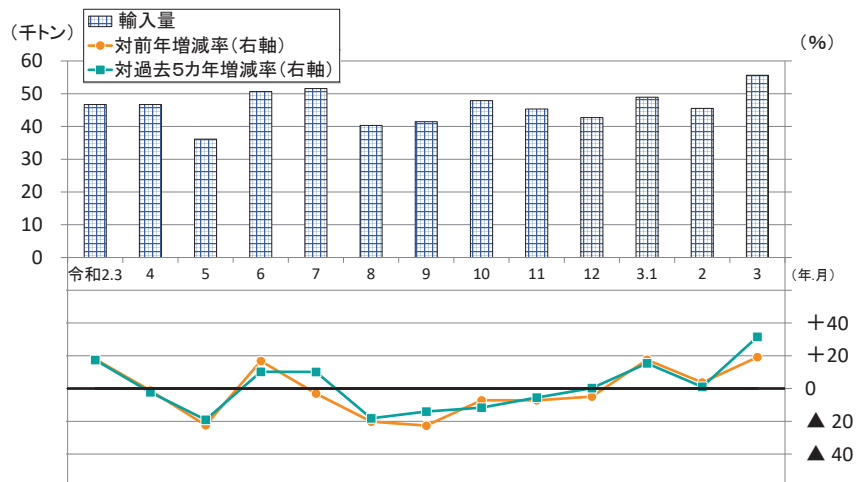
注2：成鶏肉を含む。

2 3月の輸入量は、流通遅延などによる通関の繰り延べによりブラジル産の輸入量がかなり大きく増加したことに加え、ブラジル産の諸外国からの引き合いの増加やオファー価格の上昇によるタイ産の値頃感によりその代替としてタイ産の輸入量が大幅

に増加したことから、5万5627トン（同19.1%増）と前年同月を大幅に上回った（図12）。

なお、過去5カ年の3月の平均輸入量との比較でも、31.6%増と大幅に上回った。

図 12 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」

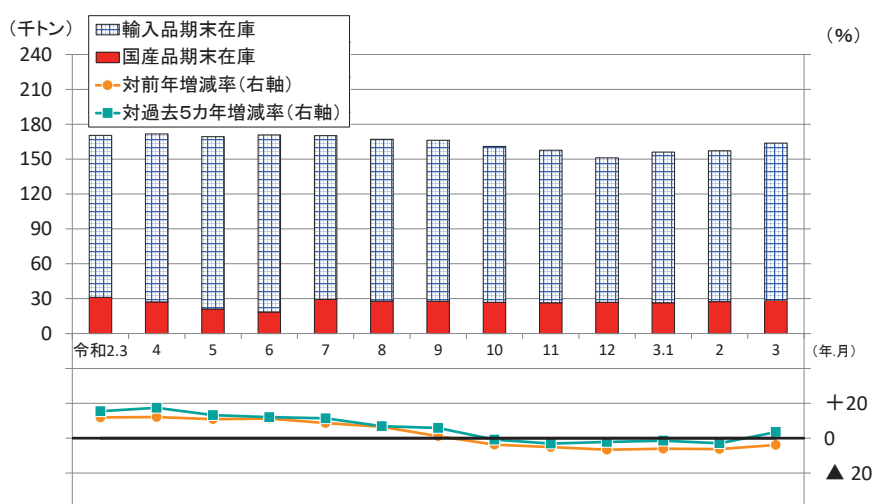
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

- 3 3月の鶏肉の家計消費量（全国1人当たり）は、520グラム（同4.9%減）と前年同月をやや下回った（総務省「家計調査」）。
- 4 3月の推定期末在庫は、16万3802トン（同3.9%減）と前年同月をやや下回った（図13）。このうち、輸入品は13万5022トン（同3.1%減）と前年同月を

やや下回った。

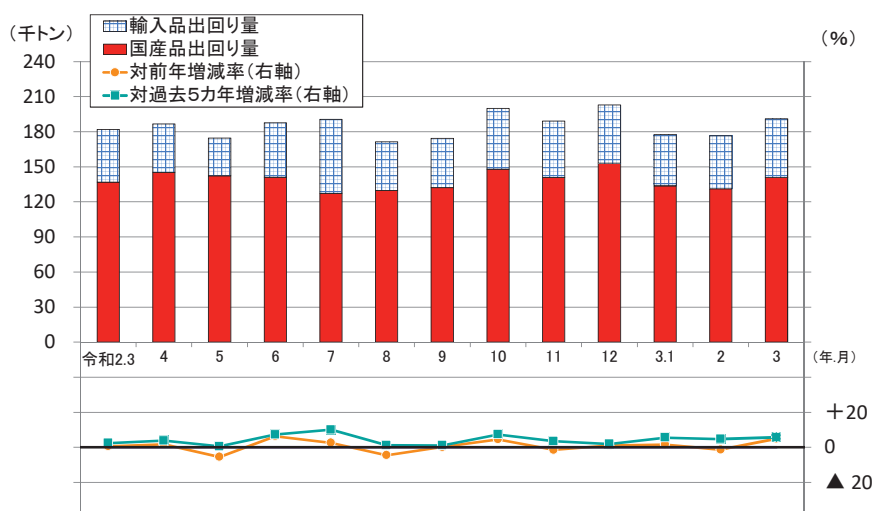
推定出回り量は、19万1006トン（同4.9%増）と前年同月をやや上回った（図14）。このうち、国産品は14万707トン（同2.9%増）とわずかに、輸入品は5万299トン（同11.0%増）とかなり大きく、いずれも前年同月を上回った。

図13 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図14 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 前田 絵梨)

令和2年度の食肉の需給動向について

令和2年度（令和2年4月～3年3月）の食肉の畜種別の需給動向は以下の通り。

【牛肉】生産量、和牛は増加するも乳用種・交雑種は減少

令和2年度の牛肉生産量は、33万5559トン（前年度比1.8%増）と前年度をわずかに上回った（表1）。品種別では、和牛は16万566トン（同5.7%増）と前年度をやや上回った一方、交雑種は8万2160トン（同2.4%減）、乳用種は8万7572トン（同1.6%減）と、いずれもわずかに減少した。

交雑種および乳用種は、性判別精液の活用や乳用牛への受精卵移植による和子牛の生産拡大により減少した。一方で、和牛は繁殖に仕向けられる雌牛の割合の増加や上述の和子牛の生産拡大などにより4年連続で増加となった。この結果、牛肉全体で見ると2年ぶりに前年度を上回った。

輸入量、冷蔵品・冷凍品ともに減少

令和2年度の牛肉輸入量は、59万992トン（前年度比5.0%減）と5年ぶりに減少した。このうち、主にテーブルミートとして消費される冷蔵品は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大に伴う北米の現地工場の操業停止などによる生産量の減少や豪州産の干ばつ後の牛群再構築による生産量減少に伴う現地価格の高騰などから、25万8136トン（同7.2%減）と前年度をかなりの程度下回った。冷蔵品は、米国産と豪州産で9割を占めており、米国産は12万4714トン（同3.0%減）とやや、豪州産は11万

1170トン（同10.7%減）とかなりの程度、ともに前年度を下回った。また、カナダ産が9993トン（同18.7%減）となるなど、その他の国でも減少が見られた。

一方、主に加工・業務用に仕向けられる冷凍品は、冷蔵品と同様の影響に加え、COVID-19の影響による外食需要の減少などにより、33万2598トン（同3.2%減）と前年度をやや下回った。冷凍品は、豪州産と米国産で8割以上を占めており、豪州産は14万4508トン（同12.8%減）と前年度をかなり大きく下回った一方、米国産は12万7992トン（同9.6%増）とかなりの程度上回った。また、カナダ産は2万9371トン（同12.2%減）となった一方、その他の国では増加が見られた。

推定出回り量、輸入品は減少するも国産品は増加

令和2年度の牛肉の推定出回り量は、93万353トン（前年度比0.7%減）と5年ぶりに減少した。このうち輸入品は、外食仕向け割合が国産品より高く、その外食消費がCOVID-19の影響により振るわなかったことなどから、60万2189トン（同1.8%減）と前年度をわずかに下回った。一方、国産品は、家計仕向け割合が輸入品より高く、その家計消費がCOVID-19の影響による内食需要の増加で好調だったことなどから、32万8164トン（同1.4%増）とわずかに上回った。

年度末（3年3月）の推定期末在庫は11万7475トン（同7.4%減）と前年度末をかなりの程度下回った。このうち、9割以上を

占める輸入品在庫は10万4931トン（同9.6%減）と前年度末をかなりの程度下回った

一方、国産品在庫は1万2544トン（同17.1%増）と前年度末を大幅に上回った。

表1 牛肉需給表

年度	生産量									輸入量					
			うち和牛		うち交雑種		うち乳用種				うち冷蔵品		うち冷凍品		
	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	
H28	324,160	▲2.5%	142,554	▲5.7%	79,174	5.4%	98,309	▲3.8%	525,694	7.9%	239,522	15.7%	285,516	2.2%	
29	329,691	1.7%	145,050	1.8%	86,819	9.7%	93,871	▲4.5%	571,854	8.8%	269,949	12.7%	301,158	5.5%	
30	332,851	1.0%	149,183	2.8%	88,725	2.2%	90,911	▲3.2%	619,686	8.4%	278,741	3.3%	340,422	13.0%	
R1	329,654	▲1.0%	151,965	1.9%	84,179	▲5.1%	89,003	▲2.1%	622,332	0.4%	278,119	▲0.2%	343,611	0.9%	
2	335,559	1.8%	160,566	5.7%	82,160	▲2.4%	87,572	▲1.6%	590,992	▲5.0%	258,136	▲7.2%	332,598	▲3.2%	

年度	推定期末在庫						推定出回り量					
			うち輸入品		うち国産品				うち輸入品		うち国産品	
	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)
H28	102,793	▲11.4%	92,020	▲12.3%	10,773	▲3.0%	860,999	3.8%	538,565	7.5%	322,435	▲1.9%
29	97,568	▲5.1%	88,070	▲4.3%	9,498	▲11.8%	903,802	5.0%	575,804	6.9%	327,998	1.7%
30	115,940	18.8%	107,206	21.7%	8,734	▲8.0%	930,365	2.9%	600,550	4.3%	329,815	0.6%
R1	126,843	9.4%	116,128	8.3%	10,715	22.7%	936,945	0.7%	613,410	2.1%	323,534	▲1.9%
2	117,475	▲7.4%	104,931	▲9.6%	12,544	17.1%	930,353	▲0.7%	602,189	▲1.8%	328,164	1.4%

資料：農林水産省「食肉流通統計」、財務省「貿易統計」、在庫量は農畜産業振興機構調べ

注1：部分肉ベース。

注2：輸入量のうち、冷蔵品および冷凍品はくず肉を含まない。

【豚肉】生産量、前年度をわずかに上回る

令和2年度の豚肉生産量は、と畜頭数（前年度比1.9%増）が増加したことにより、91万6655トン（同1.5%増）と前年度をわずかに上回り、3年連続で増加した（表2）。

輸入量、前年度をかなりの程度下回る

令和2年度の豚肉輸入量は88万3985トン（前年度比7.3%減）と前年度をかなりの程度下回った。内訳を見ると、冷蔵品は41万8240トン（同0.6%増）と前年度をわずかに上回った一方、冷凍品は46万5703トン（同13.3%減）と前年度をかなり大きく下回った。これは、前年度の冷凍品の輸入量

が中国におけるアフリカ豚熱の影響による先高感で輸入業者が早めに手当てしたことにより多かったことなどによるとみられる。

冷蔵品は、米国産とカナダ産で9割以上を占めており、米国産は20万722トン（同2.6%減）と前年度をわずかに下回った一方、カナダ産は20万724トン（同0.6%増）と前年度をわずかに上回った。また、主に加工・業務用に仕向けられる冷凍品は、スペイン産、デンマーク産、メキシコ産で半分以上を占めており、スペインは平成30年度から冷凍品の最大の輸入先となっている。スペイン産は9万8946トン（同19.4%減）、デンマーク産は7万4264トン（同27.5%減）と大幅に、メキシコ産は8万7792トン（同6.3%減）とかなりの程度、いずれも前年度を下回った。

推定出回り量、国産品は増加するも 輸入品は減少

令和2年度の豚肉の推定出回り量は、182万7335トン（前年度比0.9%増）と2年ぶりに増加した。増加の背景には、消費量の5割を占める家計消費がCOVID-19の影響によって好調であったことなどがあるとみられる。内訳を見ると国産品は91万6155トン（同2.0%増）と前年度をわずかに上回った

一方、輸入品は91万1180トン（同0.2%減）と前年度並みとなった。

年度末（3年3月）の推定期末在庫は18万1984トン（同13.4%減）と前年度末をかなり大きく下回った。このうち、9割近くを占める輸入品在庫は15万7880トン（同14.7%減）とかなり大きく、国産品在庫は2万4104トン（同3.8%減）とやや、いずれも前年度末を下回った。

表2 豚肉需給表

年度	生産量		輸入量					
	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	うち冷蔵品		うち冷凍品	
					トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)
H28	894,197	0.7%	877,006	6.2%	364,034	6.8%	512,951	5.8%
29	890,082	▲0.5%	925,631	5.5%	398,826	9.6%	526,781	2.7%
30	897,499	0.8%	916,172	▲1.0%	405,357	1.6%	510,794	▲3.0%
R1	902,919	0.6%	953,112	4.0%	415,663	2.5%	537,419	5.2%
2	916,655	1.5%	883,985	▲7.3%	418,240	0.6%	465,703	▲13.3%

年度	推定期末在庫						推定出回り量					
	うち輸入品		うち国産品		うち輸入品		うち国産品		うち輸入品		うち国産品	
	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)
H28	177,519	4.8%	161,669	5.4%	15,850	▲0.6%	1,762,517	2.4%	868,765	4.2%	893,752	0.7%
29	180,974	1.9%	160,500	▲0.7%	20,474	29.2%	1,811,633	2.8%	926,800	6.7%	884,833	▲1.0%
30	166,489	▲8.0%	145,268	▲9.5%	21,221	3.6%	1,827,446	0.9%	931,404	0.5%	896,042	1.3%
R1	210,137	26.2%	185,075	27.4%	25,062	18.1%	1,811,550	▲0.9%	913,305	▲1.9%	898,245	0.2%
2	181,984	▲13.4%	157,880	▲14.7%	24,104	▲3.8%	1,827,335	0.9%	911,180	▲0.2%	916,155	2.0%

資料：農林水産省「食肉流通統計」、財務省「貿易統計」、在庫量は農畜産業振興機構調べ

注1：部分肉ベース。

注2：輸入量のうち、冷蔵品および冷凍品はくず肉を含まない。

【鶏肉】生産量、前年度に続き過去 最高を更新

令和2年度の鶏肉生産量は、166万3186トン（前年度比0.8%増）と前年度をわずかに上回り、過去最高となった（表3）。増加の背景には、近年、消費者の健康志向の高ま

りなどによる底堅い需要を受け、生産者の増産意欲が高まっていることがあるとみられる。

輸入量、前年度をやや下回る

令和2年度の鶏肉輸入量は、55万2832トン（前年度比3.4%減）と前年度をやや下回った。鶏肉の輸入量は、国内の在庫水準に

左右されることから年度によって増減が見られ、2年度の減少の背景には、輸入品在庫の積み増しやCOVID-19の影響による外食需要の減少があるとみられる。輸入品は、ブラジル産とタイ産で9割以上を占めており、ブラジル産は40万4647トン（同4.7%減）と前年度をやや下回った一方、タイ産は13万3362トン（同4.2%増）とやや上回った。

推定出回り量、前年度に続き過去最高を更新

令和2年度の鶏肉の推定出回り量は、近年、消費者の健康志向などを背景に増加傾向で推移しており、222万2663トン（前年度比0.8%増）と前年度をわずかに上回り、過去最高となった。増加の背景には、COVID-19

の影響による内食需要の増加に加え、唐揚げなどの持ち帰り需要の増加があるとみられる。このうち、全体の7割以上を占める国産品は、大半を占める家計消費が好調なことから166万5527トン（同1.1%増）と10年連続の増加となった一方、主に加工・業務用に利用されている輸入品は55万7136トン（同0.1%減）と前年度並みとなった。

年度末（3年3月）の推定期末在庫は16万3802トン（同3.9%減）と前年度末をやや下回った。このうち、8割以上を占める輸入品在庫は13万5022トン（同3.1%減）とやや、国産品在庫は2万8780トン（同7.5%減）とかなりの程度、いずれも前年度末を下回った。

表3 鶏肉需給表

年度	生産量		輸入量		推定期末在庫					
	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	うち輸入品		うち国産品			
					トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)
H28	1,545,177	0.9%	525,767	▲4.6%	135,759	▲13.2%	112,675	▲15.5%	23,084	▲0.4%
29	1,588,158	2.8%	593,037	12.8%	176,552	30.0%	148,123	31.5%	28,429	23.2%
30	1,599,823	0.7%	544,923	▲8.1%	152,329	▲13.7%	124,677	▲15.8%	27,652	▲2.7%
R1	1,650,389	3.2%	572,118	5.0%	170,447	11.9%	139,326	11.7%	31,121	12.5%
2	1,663,186	0.8%	552,832	▲3.4%	163,802	▲3.9%	135,022	▲3.1%	28,780	▲7.5%

年度	推定出回り量					
	うち輸入品		うち国産品			
	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)
H28	2,091,629	2.4%	546,361	5.6%	1,545,268	1.3%
29	2,140,402	2.3%	557,589	2.1%	1,582,813	2.4%
30	2,168,969	1.3%	568,369	1.9%	1,600,600	1.1%
R1	2,204,389	1.6%	557,469	▲1.9%	1,646,920	2.9%
2	2,222,663	0.8%	557,136	▲0.1%	1,665,527	1.1%

資料：財務省「貿易統計」、農畜産業振興機構調べ

注1：生産量は骨付き肉ベース。

注2：成鶏肉含む。

注3：輸入量には鶏肉以外の家きん肉を含まない。

(畜産振興部 高城 啓)

牛乳・乳製品

令和2年度のバター・脱脂粉乳生産量、新型コロナウイルス感染症の影響により大きく増加

3月の全国生乳生産量、前年同月比0.8%増

令和3年3月の全国が生乳生産量は、65万5238トン（前年同月比0.8%増）と前年同月をわずかに上回った（図15）。地域別に見ると、北海道は35万8763トン（同1.4%増）、都府県も29万6475トン（同0.1%増）と、いずれも前年同月をわずかに上回り、堅調に推移した。

3月の生乳処理量を用途別に見ると、牛乳等向けは32万9087トン（同5.8%増）と前年同月を上回り、このうち業務用向けは2万6678トン（同7.0%増）と15カ月ぶりに前年同月を上回った。一方、乳製品向けは、32万2419トン（同3.8%減）と前年同月をやや下回った。品目別に見ると、チーズ向けが4万421トン（同2.5%減）、脱脂粉乳・バター等向けが17万2130トン（同7.2%減）と前年同月を下回ったものの、クリーム向けは6万3368トン（同10.9%増）と前年同月

をかなりの程度上回った。

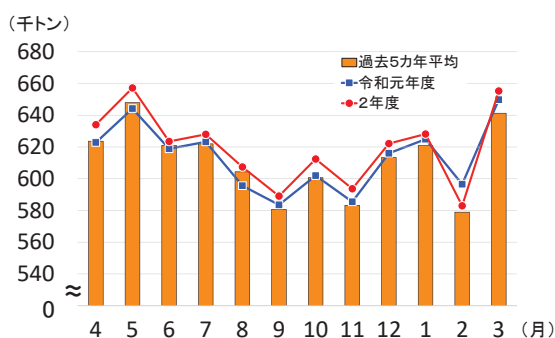
上記の結果、同月の市乳化率^(注)は、前年同月と比べ2.3ポイント高い50.2%となった。市乳化率は例年、学校の春休みを迎える3月が最も低く、特に、2年3月には、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大を背景とする学校給食用牛乳の需要減少や外出自粛に伴う業務用牛乳需要の減少により、47.9%まで低下した。本年3月は、21日まで11都府県で緊急事態宣言が発令されたが、休校などの措置は取られず、市乳化率は例年並みの水準となった（農林水産省「牛乳乳製品統計」、農畜産業振興機構「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

(注) 生乳生産量に占める牛乳等向け処理量の割合。

令和2年度都府県の生乳生産量、8年ぶりの増産

令和2年度の生乳生産量は、743万3328トン（前年度比1.0%増）と前年度をわずかに上回った（図16）。地域別に見ると、北海道は4年連続で前年度を上回り、415万8475トン（同1.6%増）と堅調に推移した。都府県も327万4853トン（同0.1%増）と、わずかながらも8年ぶりの増産となった。特に、中国地域は前年度を4.8%上回り、3年連続の増産となった。また、東山地域と近畿地域は、昨年度までそれぞれ24年間、23年間連続して前年度を下回り、減少傾向で推移していたが、2年度は前年度をそれぞれ

図15 生乳生産量の推移



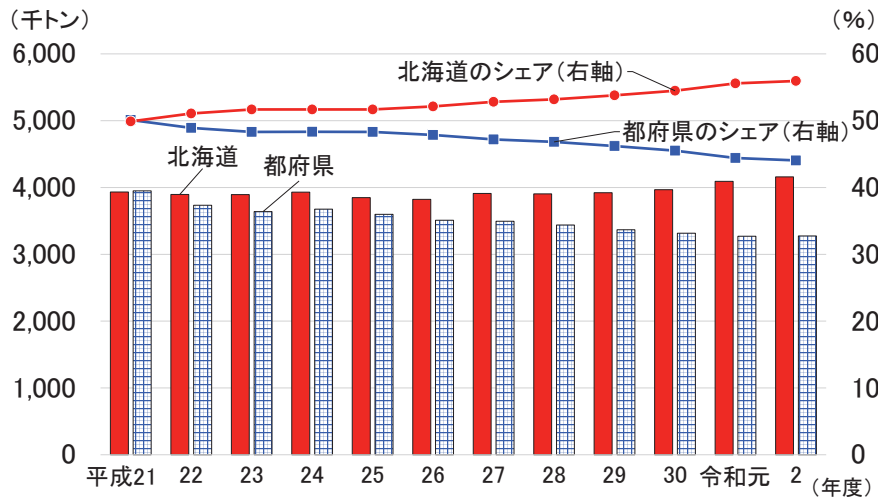
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

2.3%、1.5%上回るなど、これらの地域において生乳生産の増産が見られた。

なお、全国が生乳生産量に占める北海道のシェアは55.9%、都府県は44.1%となった。北海道が都府県を上回った平成22年度以来、

シェアの差は拡大基調で推移してきたが、今年度は都府県の生産量増加により、昨年度からの増加幅は0.7ポイント増と、わずかな増加にとどまった。

図 16 地域別生乳生産量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

令和2年度牛乳生産量は、直接飲用がけん引し前年度比微増

令和2年度の牛乳生産量を区分別に見ると、学校給食用は32万7846キロリットル（前年度比0.5%減）、業務用は27万7594キロリットル（同12.3%減）と、いずれも前

年度を下回った。一方、全体の8割を占める家庭内消費主体の直接飲用が258万9670キロリットル（同3.1%増）とやや増加したため、牛乳全体として見ると319万5110キロリットル（同1.2%増）と前年度をわずかに上回った（表4）。

区分別の動向を月別に見ると、COVID-19

表 4 牛乳等生産量の推移

(単位：千キロリットル)

年度	牛乳			加工乳・成分調整牛乳			はっ酵乳	
	前年度比(増減率)	うち業務用向け	うち学校給食用	前年度比(増減率)	うち直接飲用	前年度比(増減率)	前年度比(増減率)	
平成30	3,154 1.9%	325 5.9%	356 ▲0.6%	2,473 1.8%	412 ▲6.4%	1,063 ▲1.1%		
令和元	3,159 0.1%	317 ▲2.6%	329 ▲7.5%	2,513 1.6%	410 ▲0.7%	1,033 ▲2.8%		
2	3,195 1.2%	278 ▲12.3%	328 ▲0.5%	2,590 3.1%	389 ▲5.1%	1,053 1.9%		

資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

注1：小数第1位以下は、四捨五入。

注2：直接飲用牛乳生産量は、牛乳生産量全体から業務用と学校給食用を除いた数量であり、機構にて算出。

の影響を受けて大きく変動した1年間であった。学校給食用は、通年としては上述の通り前年度をわずかに下回った水準となったものの、4～5月にかけては全国的な小中学校の臨時休校を受けて前年同月を約80%下回った一方、7～8月にかけては夏休みの短縮によりそれぞれ前年同月を43.0%、172.7%上回った。他方、業務用は、同年4月に1度目の緊急事態宣言が発令されたことで需要が大幅に落ち込み、その後も外出自粛などの影響を受け年間を通して減少傾向で推移したことから、通年で見ても前年度をかなり大きく下回る水準となった。直接飲用については、巣ごもりによる増加に加え、農林水産省が実施した「プラスワンプロジェクト」や乳業メーカーなどの販売促進活動などの取り組みが後押ししたこともあり、年度前半を中心に堅調に推移した。

なお、牛乳等のうち、平成28年度をピークに昨年度まで減少傾向にあったはち酵乳は、免疫力強化の観点からの健康志向の高まりなどを背景とする需要拡大に支えられ、令和2年度前半に増産され、同年度の生産量は105万3029キロリットル（同1.9%増）と、4年ぶりに前年度を上回った。

令和2年度乳製品等生産量、バター・脱脂粉乳およびチーズ以外はおおむね低調

令和2年度の乳製品等生産量を品目ごとに見ると、バターは7万944トン（前年度比8.3%増）、脱脂粉乳は14万432トン（同7.6%増）と前年度をかなりの程度上回った（表5）。これらの品目は、上述の通り学校給食用牛乳の供給停止や外出自粛に伴う業務用牛乳需要の減少などにより過剰となった生乳の廃棄を回避すべく、春から夏にかけて緊急的な増産が行われ、その後も例年に比べて増加傾向が続いている。

また、チーズは、巣ごもり需要などに代表される家庭内消費の拡大から、16万535トン（同2.4%増）と前年度をわずかに上回った。一方、その他の乳製品は、業務用需要の減少を受け、れん乳類は前年度比10.4%減、全粉乳は同23.3%減、クリームは同4.7%減、アイスクリームは同10.5%減と、軒並み前年度を下回った。特に、れん乳類と全粉乳は、年間を通して前年同月を下回って推移し、過去最低水準となった。

表5 乳製品等の生産量の推移

（単位：トン、アイスクリームのみキロリットル）

年度	バター		脱脂粉乳		れん乳類		全粉乳		チーズ		クリーム		アイスクリーム	
		前年度比 (増減率)		前年度比 (増減率)		前年度比 (増減率)		前年度比 (増減率)		前年度比 (増減率)		前年度比 (増減率)		前年度比 (増減率)
平成30	59,828	▲0.3%	120,065	▲1.2%	36,379	▲8.4%	9,623	▲2.5%	157,545	4.3%	116,109	▲0.1%	147,301	▲1.1%
令和元	65,495	9.5%	130,497	8.7%	37,397	2.8%	10,297	7.0%	156,788	▲0.5%	115,838	▲0.2%	145,258	▲1.4%
2	70,944	8.3%	140,432	7.6%	33,493	▲10.4%	7,893	▲23.3%	160,535	2.4%	110,437	▲4.7%	129,936	▲10.5%

資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

注：小数第1位以下は、四捨五入。

（酪農乳業部 鈴木 香椰）

鶏卵

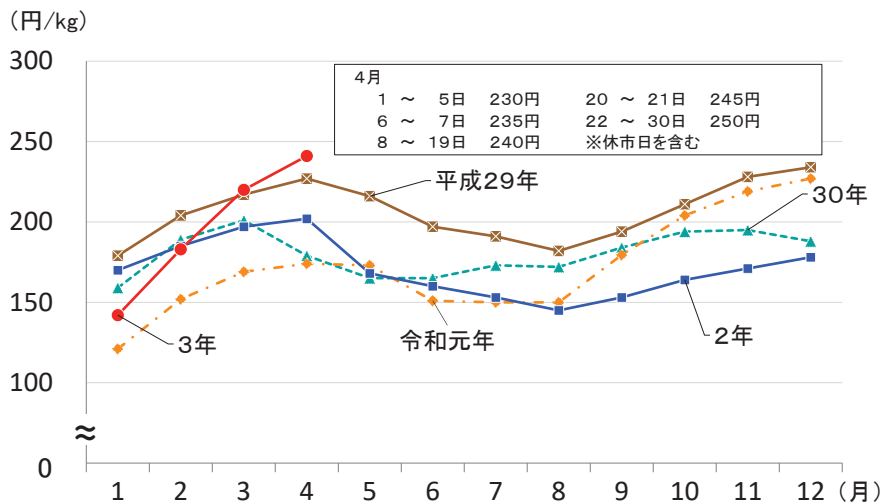
鶏卵卸売価格、2カ月連続で前年同月を上回る

令和3年4月の鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、1キログラム当たり241円（前年同月比39円高）と2カ月連続で前年同月を上回った（図17）。前月から同21円上昇し、直近5カ年の4月の同価格と比較すると最も高い水準となった。

同価格は、例年、最需要期の12月に向け

て上昇した後、年明けに下落し、春先に向けて再び上昇する傾向がある。4月の同価格は、月初の同230円から、下旬には同250円まで上昇し、1カ月間の上昇幅は同20円となった。高病原性鳥インフルエンザの発生による殺処分羽数の増加などにより、価格は例年を上回って推移している。

図17 鶏卵卸売価格（東京、M玉）の推移



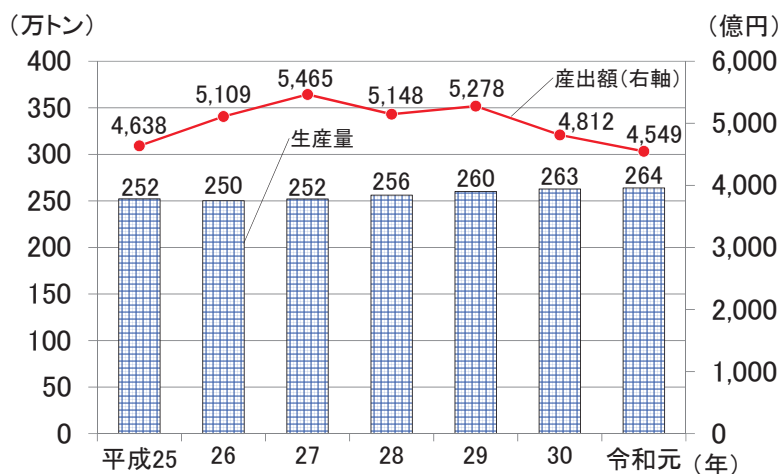
資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」
注：消費税を含まない。

今後について、供給面は、一般的に鳥インフルエンザの発生リスクが高いとされる時期は過ぎたものの、殺処分羽数の増加により供給量は引き続き抑えられるとみられる。需要面は、東京都などに3度目の緊急事態宣言が発令され、一部地域においてもまん延防止等重点措置が講じられるなど、引き続き巣ごもり需要は継続すると見込まれる一方、外食需要の回復には時間を要するものとみられる。

令和元年の鶏卵産出額は前年をやや下回る

令和3年3月12日に農林水産省が公表した「令和元年農業総産出額及び生産農業所得」によると、元年の鶏卵の産出額（全国推計）は4549億円（前年比5.5%減）と前年をやや下回った（図18）。鶏卵生産量は、平成25年夏以降、家庭用、業務加工用ともに需

図 18 鶏卵の産出額および生産量の推移



資料：農林水産省「鶏卵流通統計調査」、「生産農業所得統計」

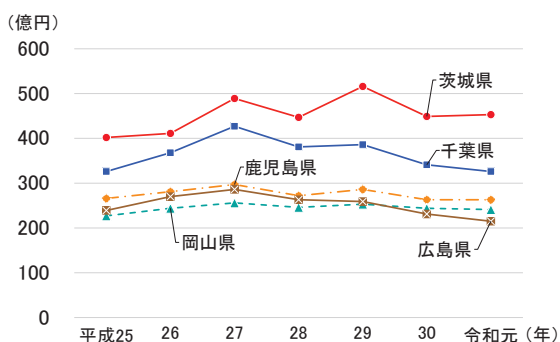
要が旺盛であったことなどから、鶏卵卸売価格が堅調に推移したことで生産者の増産意欲が高まり、増加傾向で推移している。これに伴い、26～29年の産出額は5000億円台で推移した。しかしながら、30年および令和元年の産出額は、生産量の増加に伴う需給緩和により鶏卵相場が低い水準で推移した結果、生産量の増加に反して、ともに前年を下回る水準となった。

都道府県別の上位5県の鶏卵の産出額（都道府県別推計）^(注)を見ると、最も産出額が大きかったのは最大の鶏卵生産地である茨城県で453億円（全国シェア9.9%）となった

（図19、20）。第2位は千葉県で326億円（同7.1%）、第3位は鹿児島県で263億円（同5.7%）となった。元年の鶏卵生産量を見ると、第2位は鹿児島県、第3位は千葉県であり、鶏卵産出額と順位が逆転している。次いで、岡山県が241億円（同5.2%）、広島県が215億円（同4.7%）となった。

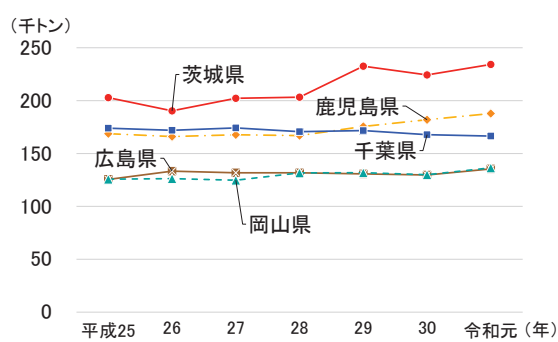
（注） 都道府県別推計は、他の都道府県に販売された中間生産物（最終生産物となる農産物の生産のために再び投入される農産物をいい、種子や子豚、種卵などが該当する）を農業産出額に計上するため、都道府県別推計の合計値と全国推計の農業産出額は必ずしも一致しない。

図 19 上位 5 県の鶏卵産出額の推移



資料：農林水産省「生産農業所得統計」

図 20 上位 5 県の鶏卵生産量の推移



資料：農林水産省「鶏卵流通統計調査」

（畜産振興部 前田 絵梨）